



〈トヨタコミュニティーコンサート〉
ブラームスの午後

平成5年7月11日(日)
午後2時 開演
市川市文化会館大ホール

1993

233 th



平成5年度市川市文化祭 参加
第233回 市響・交響楽の午後

主催／市川市教育委員会 市川交響楽団協会

協賛／千葉県トヨタ販売店グループ トヨタ自動車(株)

プログラム

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品77 ヨハネス・ Brahms
(1833-1897)

- 第1楽章 アレグロ・ノン・トロッポ
第2楽章 アダージョ
第3楽章 アレグロ・ジョコーソ

演奏時間 約40分

————— 休 憇 ————

交響曲第4番 ホ短調 作品98 ヨハネス・ Brahms
(1833-1897)

- 第1楽章 アレグロ・ノン・トロッポ
第2楽章 アンダンテ・モデラート
第3楽章 アレグロ・ジョコーソ
第4楽章 アレグロ・エネルジコ

演奏時間 約45分

指揮：橋本久喜
ヴァイオリン独奏：大谷康子
管弦楽：市川交響楽団
楽譜協力：トヨタミュージックライブラリー

●出演者のプロフィール

指揮：橋本久喜



Photo / 篠原 栄治

国立音楽大学ピアノ科卒業。79年ウィーン国立音楽大学指揮科に入学。指揮法を故山田一雄、G.ロジェストヴェンスキー各氏に師事。その後ウィーン国立歌劇場でアシスタント・コレベティールを務める。82年5月、首席で卒業。ウィーン楽友協会における演奏会は各新聞紙上で卓越したバトンテクニックと音楽センスを絶賛された。同年より故カラヤン氏によるオペラ公演にプライベート・コレベティールとして参加する。83年ブザンソン国際指揮者コンクール入賞。85年ウィーン室内管弦楽団定期演奏会では、正統的な解釈と洗練された演奏で高い評価を獲得。86年より国内の主要オーケストラに客演を重ね、最近は、NHK番組、映画等のレコーディングも多く、91、92年は外来公演（歌劇「ポーギーとベス」、パリ・オペラ座バレエ等）の代理指揮者を務める。平成2年度滋賀県文化奨励賞受賞。神戸市混声合唱団指揮者 東京コンセルヴァトアール尚美指揮科講師 日本指揮者協会会員

ヴァイオリン：大谷康子



Photo / 木之下 晃

3歳で西崎信二氏についてヴァイオリンを始め、その後兎束龍夫、福元裕、ジャン・ローラン、海野義雄、田中千香士の各氏に師事。東京芸術大学、同大学院博士課程修了。1972年全日本音楽コンクール全国第1位、1976年シェリング来日記念ヴァイオリンコンクール第2位。現在東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団首席コンサントマスター。1988年には、日本の女性ヴァイオリニストで初めて一夜に三曲のヴァイオリン協奏曲の独奏に成功し、各方面の注目を集め。1990年春には、ヨーロッパ四都市でリサイタルを開き好評を博す。これまでに全国各地のリサイタル、テレビ・ラジオ出演、さらに室内楽や現代音楽の分野にも力を入れ、幅広く活躍中。

曲 目 解 説

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品77

何が始まるかわからない不安と期待を暗示させながらこの曲はスタートします。緊張感、高揚感が次第に大きくなり、恍惚感が支配し、自分が何処にいるのかわからなくなります。

その後いったん静けさが支配し、再びソロヴァイオリンへの期待を感じさせながら曲はソロを待ちます。

ベートーヴェン、メンデルスゾーン、チャイコフスキイと並び称される Brahms のヴァイオリンコンチェルトは、1878年彼が45歳の時作曲されました。

この曲は彼の音楽に影響を与えたヴァイオリニスト ヨセフ・ヨアヒムの助言を受けて作曲され、また初演もヨアヒムのソロでブラームス自身の指揮によって行われました。

しかしこの曲の成立に欠くことができないもう一人のヴァイオリニストにレメニーがあげられます。彼はハンガリー出身で、まだブラームスが無名でピアノを酒場などで弾いて生計をたてているとき、ブラームスを伴奏者として演奏旅行にでかけたことがあります。また前述のヨアヒムをブラームスにひきあわせたのも、レメニーです。ブラームスとヨアヒムは会ったとたん意気投合したといいます。

さて今日の演奏は大谷康子さんにソロをお願いしました。素晴らしいヴァイオリニストと共に演できる喜びを感じながら、今日しかできない、指揮者とソリストとオーケストラと演奏を聴きにきていただいた方々が一体になった演奏（出会い）を楽しみたいと思います。

（ヴァイオリン：堤）

交響曲第4番 ホ短調 作品98

ブラームスは、その生涯に交響曲を4曲しか作曲していない。主要な交響曲作曲家の中では、最も少ない作品数といえるであろう。しかしながら、その作品群はいずれも高い完成度であり、ロマン派の交響曲として、ひいては交響曲史上きわめて重要な地位にあるといってよい。

交響曲第4番は、第3交響曲を完成した翌年の1884年から85年にかけて作曲された。時にブラームス52歳であった。この曲は、これまでの3つの交響曲とは性格を異にする部分が多い。彼は、新古典派とも呼ばれ、その管弦楽法は全般的に古めかしく、保守的な要素が強いが、この曲ではその面が一層鮮明に打ち出されている。第2楽章に用いられている古ぼけた教会音階や、終楽章のパッサカラをはじめとして全楽章を通じて憂愁味にあふれており、ベートーヴェンばりの苦悩から闘争、そして勝利・歓喜といったプロセスを見出すことができない。人生の寂しさ、むなしさといったようなものに裏打ちされた音楽とでも表現できようか。

このような特徴ゆえに、1985年の初演後しばらくは一般には理解されなかった。作曲者の親友の一人であるカルベックは、この曲の発表を見合わせるように勧めたといわれており、また、マーラーもこの曲を「からっぽな音の棧敷」と評したという。しかし、現代のストレス社会に生きる我々にとってこの曲のよさは、ひときわよく感じ取れるように思われる。

（ヴィオラ：高橋）

ブラームスとウィーン

須永恒雄
(独文学・団員)

1862年9月に故郷ハンブルクを発ってウィーン入りしたブラームスは、じきにまたハンブルク・フィルハーモニーの指揮者として呼び戻されるものとばかり思っていた。ところが彼の当初のそんな思惑とは異なって、郷里では歌手のシュトックハウゼン某を代りに選び、おまけに次回の選出の際にも彼を除外、これをブラームスは大いに根に持て後々まで忘れなかつたという。

一方ウィーンではたちまち友人知人の取り巻きが出来て、翌63年にはウィーン・ジングアカデミーの指導を委ねられ張り切るが、付帯する雑用に閉口してシーズンで退任。傍ら安定した地位や「合唱団との恒常的な繋がり」に憧れるもののこれは容易に手に入らない。容易に手に入らなかつたものの中には結婚生活も数えられるが、こうした数々の定住への試みは一方でまた、ますます強固になりまさる独立独歩への意志と、じつは簡単に相容れる筈のものではなかつたとも言える。ともあれ1871年、ウィーンはカールスガッセ4番地、カール教会と現在ではT U即ち工科大学の間を縫う小路に、ブラームスは定住を決める。

翌年からは楽友協会の指導を受けたもののまたしても雑務の煩瑣なことに耐えられず同75年任を退く。宮仕えと創作活動の両立の難しさを思い知るが、翌76年に15年越しの第1交響曲に決着をつけてからは内外ともに安住の地を見出して創作に励むことになる。

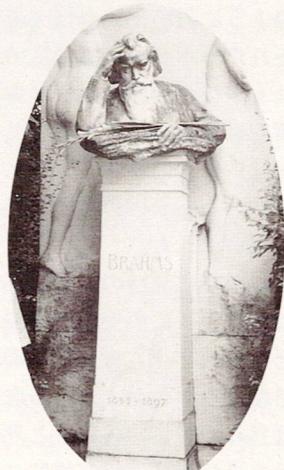
リスト=ヴァーグナー陣営から、とりわけ同84年頃からは若きウォルフによる筆鋒鋭い攻撃を受けながらも、徐々に根強い味方を回りに集めるにいたる。即ちヴァーグナーとブルックナーの許に走ったレーヴィに代つてか

つてのワーグナーの弟子ビューローがマイニンゲンでブラームスの作品を献身的にとり上げ、ウィーンではハンスリック、ヨハン・シュトラウス、ビルロート等の熱心な取り巻きに恵まれて、この都の魅力のとことなる。

夏にはまた心ゆくまでオーストリアの自然を愉しみ、かつまた創作に勤しんだが、例えばヴァイオリン協奏曲はケルンテンのペルツチャッハで、また第4交響曲はゼンメリング峠のミュルツツーシュラークで誕生した。

1893年彼の60歳の誕生日を祝つてウィーン楽友協会はブラームス記念貨幣を鋳造、作曲家は名声を極める。かつての師匠の妻で密かに恋心を捧げていたクララ・シューマンの埋葬にボンに旅して戻つた滞在先のイシュルで黄疸を発し（肝臓癌）急速に衰弱、翌97年3月初めにはウィーンでそれでも音楽会に足を運んだものの26日死の床に就き、翌4月3日朝の9時半頃に瞑目、ウィーン中央墓地のベートーヴェンとシューベルトの墓の近くに葬られる。

(次頁へ)



ウィーン中央墓地

先年ウィーン滞在中に聴いたブラームスの中で忘れ難いものが二つあった。その一つはいまを時めく(?)独特無比のピアニスト、ヴァレリー・アファナシェフがウィーン・コンツェルトハウスで弾いた作品116の幻想曲集。これは晩年の静まりかえったひそやかさ、澄明な秋のたたずまいなどというものはおよそ相容れない、そんな先入観の枠組みをはるかにはみ出した、凄絶な聴き物であった。

もとより春爛漫の生命の汪溢とは異なり、一切が等しく新たに天に向かって際限なく無邪気に伸張してゆくのではない。成長はすでに終わって、出来上がった形はあちこちに綻びを生じ、毀れ解けて再び夫々の無に帰する日を待つ、秋といえばこれまたまさに秋には違いないが、すでに枝から落ちて散った枯葉は水のなかに沈んで折り重なってもそのまま静かに朽ち果てるとは限らない。

不図何處からか巻き起こった水流によるものか、それとも何時しか水底の積った落ち葉の中から期せずして湧いて出た不可思議な生命のなせるわざか、俄かに蠢めき出し、右往左往して、ますます周囲を巻き込み乍ら荒れ狂うものがある。

無数の落ち葉の、はじけた発条のようにぎこちなくも止め度のないそんな動きは、どこか舞踏病をも連想させるが、それら無数の朽葉の中から、朽葉を搔き分けつつ自らも亦一葉の朽葉のように這い出す奇怪千万な生き物がある。それ自身水底の動搖騒乱の化身のような、これも一種の擬体か、偶々寄り集った数枚の朽葉が独りでにくつつき合って動きだしたとしか言いようのない、まさに造化の妙と呼ぶにふさわしい異形の亀の一種マタマタを図らずも思い出した。

爬虫類や昆虫類に独特の、動と不動が奇妙に絹交ぜになった、この上なく緩慢なようでいてあるとき目にも止らぬ速度で瞬時に移動を遂げる早業にも事欠かないその唐突な動きは、謂わば自らの裡に同時に生と死とを内包するが、そこで生と死とは連続的に移行するのではなくいきなり裏と表のように入替わる。

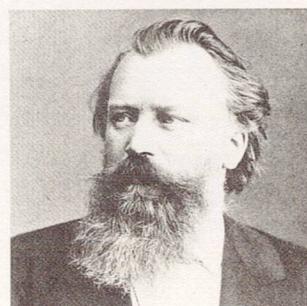
去年(こそ)の朽葉の裏に思いもかけぬ生命の蠢動がみつかるのにも似て、使い古され

形骸のみと化した音型の一見無骨な組合せの片隅、忘れられた壁龕の窪みに、ふと密かな憧れが息づき芽生えるのである。ただしこの度のアファナシェフの演奏では、それはもとより憧れ等という慎ましいものではなく、文字通り等身大を越える魑魅魍魎を誘き出してしまったといってよい、奏者の面目躍如たるものがあった。

記憶に残るブラームスの演奏のいま一つは、イギリスの歌手アン・マレイの歌曲の夕べにとりあげられた『永久(とわ)の愛』作品43ノ1で、それまで主にバロック作品等で彼女のズボン役ばかりを観聽きしてきたせいか、どちらかといえばポーカーフェイス的な印象を受けていたこの長身瘦軀の歌手が、同じくコンツェルトハウス小ホールの舞台に、予想外に小振りの頬高の丸顔をやや赤らめながら登場して、体を僅かに揺り動かしつつ歌ったこの歌は、独特の熱を帶びたものであった。

細身ながらも裡に或る興奮を秘めた歌唱は、圧縮された勁い緊張を孕み、ブロンテの小説『嵐が丘』に吹き荒れる情念にも通じるものを感じさせる。端麗な澄ました顔立ちに、たまさか去来する激情の閃きはその分だけ深い印象を残して、この歌手の隠れた一面を垣間見る思いがした。

やはり北方の出身のこの作曲家に就いて、哲学者E.プロッホのものした美しい評言を想いだす。曰く、ブラームスにも色はある。北ドイツの曠野にも似てそれは遠くから眺めると一面の単調な灰色としか見えないが、近付いてつぶさに観察すればたちまちこの灰色は溶け綻びて、目も彩の色とりどりの無数の小さな花のさまざまな色彩へと分かれゆく、と。



出会い

(今回の練習でお世話になった方々)

人と人との出会いには、様々なかたちがあるように、指揮者とオーケストラにも様々な出会いがあります。今回の演奏会では橋本さんにお世話になり、これまで自分達が考えていたブルームスのイメージ、感じ方を越えて新しいものを吹き込んでいただいたような気がします。

さて、このコーナーでは、橋本さんに振っていただく前の、譜読みの段階から練習を見てくださった根津さん、吉田さんについてご紹介させていただきます。

根津昭義さん (弦トレーナー)

3歳から才能教育でヴァイオリンを学ぶ。東京大学理学部卒業後、東京芸術大学に入學し、山岡耕筰、田中千香士、W.ミュラー、N.キャロルの各氏に師事。

現在NHK交響楽団団員、日本演奏連盟会員、日本弦楽指導者協会理事。

市響では1989年にメンデルスゾーンの協奏曲の独奏者としてお迎えして以来、1991年の国民文化祭をはじめとする演奏会のたびに、主として弦楽器パートの御指導を仰いでいます。

先生ご自身がオーケストラの現役奏者であるため、演奏する側の視点に立ったアドバイスをしていただけるので、とても勉強になります。また、私たちアマチュアの弱点もよくご存じで、そのご指摘はどれも思い当たることばかりです。

東大では物理を専攻なさったとのことで、そういえば、ご説明の中に論理的思考の片鱗がうかがえることもしばしばです。その反面、音楽的な解釈については感情表現を大切になさり、たとえばお手本に演奏してくださるときなどは、その表情豊かな音色に思わず聴きほれてしまいます。

パソコンがご趣味で、教則本を作成するなど、仕事の一部としても活用しておられるそうです。公私ともに多忙な生活を送っていらっしゃる先生ですが、市響の発展のためにも、これからもよろしく御指導をと団員一同心から願っております。

(ヴァイオリン：亀井)

吉田裕史さん (練習指揮)

東京音楽大学指揮科3年在学中。汐澤安彦氏に師事。アマチュアオーケストラの練習指揮で活躍中。船橋市在住。

吉田さんは、昨年のファミリーコンサートから練習を見ていただくようになりました。今回のブルームスでは本格的にお世話になりました。

彼には、はできはありませんが、誠実な人柄、的確な指示で市響の人望を確実に一步一步集めています。いまではオケとの信頼関係は太いものとなりました。

先日練習後、市響のメンバーと行ったレストランで、お酒を傾けながら彼はこんなことを言っていました。「東京で音楽とは関係ない大学に通っていたんですけど、どうしても音楽をやりたくて音楽の道に進みなおしました。」

彼には音楽にたいするハングリーさとでもいうか、なにかがあるような気がしました。市響も「どうしても音楽をやりたくて市響にはいました。」といえる人達の出会いの場であって欲しいと思います。

また吉田さんのような方に来ていただけるオケでありたいと思います。

吉田さんへ、「今後ほかの仕事で忙しくなるとは思いますが、市響にも足をむけて下さいネ。」

(ヴァイオリン：堤)

本日の出演者

第1ヴァイオリン

陽雄一子 甲宏匡 司子子子代子子子
久総淳 良 浩祥裕 和康昭り恵子
え千山井川木内渡田浜原延山田辺辺辺
生石角鈴竹中永広福松松村渡渡渡

第2ヴァイオリン

理恵子
薰雄兒
和恒哲
子伸弘
子武夫
千葉敦
子美子
子柳澤

ヴィオラ
久保木佳代子
斎藤十一郎
高橋行継
竹内ひみ
星乗俊昭子
松賢一雄
村淳
山上田繁子
横山玲
若林
渡部

子清扶一進二之潔
倫扶公美子進耕朝
倉瀬田中南樋福横渡
澤川頭明由原田辺

コントラバス
河内 恵二
菊池 克彦
鈴木 重則
高橋 耕二
村上 信乃
山木 和広子
李 隆子

ヴィオラ	フルート・ピッコロ
久保木佳代子	木村 純一
斎藤十一郎	木村真諭紀
高橋 行継	佐藤 洋行

オーボ工
荒井 淳
二村 直子
大坪 昌彦

クラリネット
一瀬 直美
多田 準也
時田 雄
吉野 知久

ファゴット・コントラファゴット
金坂 哲
小島 厚
戸川 安道

ホルン 河野
越塚 近藤
鳴村 菅谷
菅井 山内
山日

トランペット
安藤 宣明
一樹 泰一

トロンボーン
糸　秀樹
帽　妙絵
谷　裕至
薮　崎

打樂器 岩橋木村丹羽 正治範子裕子

平成5年度 市川交響楽団 役員

雄子一児夫子継
行和純哲恒玲行
田山村村井橋
横松木堤鳴亀高
長スター報画務財
團コンサートマチ子器
副管打樂器
企廣庶管

【市響贊助會員】

樹恵雄一郎正介生三郎節二三和浩江彰義茂子也治
憲千行良太昭弥良一賢勇延庸茂裕純信令
葉健由野井光野瀬藤藤淵島島島關葉川上島
松赤東阿蚊石今出出岩伊伊伊岩飯飯飯井稻岩岩飯

雄三雄一昭子正郎興次三達人誠廣一子男朗子子一
英キ定正克嘉一芳信義真正正璃光克末幸順
本野原賀野藤藤川々々々田藤井崎城根田水土沢
岸草栗古今近後寒佐佐佐佐桜斎坂島新島島清赤杉

甲洋衛賢靖八年方雄吉浩郎作己郎男子雄博行武弘
三正直國杜章三秀真一信壽一時貞政
中中中口中道道橋橋沢田田本海山頭口屋川田口
田田田谷竹泰泰高高丹高津塚鳥外田道中西沼野

次子薰郎年祐永子雄子昭司一サ修修博子逸行雄彦
正和太有通博枝春哲乘庄景マ敏春敏晴慶
島原田寿部賀井田口富川井野沢山岡原原木木木宅
葩萩浜服羽福平樋福古星細松松松松前三三三三

足雄一和一治也峰直彦助郎一亮茂郎郎端ズ
知徹賢元正孝秀重文之善敬博三四
岡地野上岡上本名口崎野田田浅原辺川下
光宮牧村村山山山山山安安湯吉渡横KMRシテムズ
義